

【登壇者】
高泉淳子 (たかいずみ・あつこ)



早稲田大学劇研メンバーを中心に結成された劇団「遊●機械/全自動シアター」で活躍。作、構成、演出、子供から老人まで自在に役を演じ、特にユニークな少年役は舞台のみならずメディアでも大きな話題となった。青山円形劇場を拠点にスタイリッシュな舞台づくりで人気を博し、特に『ア・ラ・カルト～役者と音楽家のいるレストラン～』は年末の風物詩として30年のロングランとなる人気レパートリーに成長。劇団解散後の現在も上演が続いている。一方で音楽ステージの演出も手がけ、ジャズボーカルでライブ活動も積極的に展開、テレビドラマでも活躍中。NHK-BSで放送された「昭和演劇大全集」で演劇評論家の渡辺保氏とパーソナリティを務め、舞台に対しての観功者ぶりもアピールした。

篠井英介 (ささい・えいすけ)



日本大学芸術学部を拠点に加納幸和らと「花組芝居」を旗揚げ。金沢に生まれ育ち幼少より日舞を習い、伝統芸能への関わり深いなか、自らも現代女形として独自の表現スタイルを確立。「花組芝居」時代にはネオ歌舞伎での女形として人気を博し、その後も『欲望という名の電車』で世界で初めて女形としてプランチを演じて話題を集めた。現在は映画、ドラマでも活躍中。また「城郭」についても詳しく文化教養番組に出ることも多い。著書に『いい芝居いい役者』がある。また高泉さんの著書『高泉淳子 仕事録』には、小劇場同期として二人の濃密な対談が収録されている。

【司会】
立石和浩 (たていし・かずひろ)

(東京芸術劇場 プロデューサー)

新宿、渋谷、青山、下北沢

——街の変遷から見る'80年代小劇場演劇史

1964年のオリンピックピックを境に劇的に変貌した東京。失われた風景もあれば新たに生まれたスポーツもありました。前の東京オリンピックピックからおよそ50年を経た東京では、時代の波とともに街や人、場所にかかわる様々なレジェンドが生まれ、語り継がれてきました。中でも60年代にカルチャーシーンを席卷した**アングラ演劇**を皮切りに花開いた日本の**小劇場文化**。そうした小劇場を支えてきた街に目を向けても、60年代の政治色濃密な**新宿**、70年代から80年代にかけて企業文化とサブカルチャーの発信拠点となった**渋谷**、そして今もって個性的な劇場群がひしめく**下北沢**、フアッションと絡んで独特なポジションを持った**青山**などが新たな街の物語を紡ぎ出してきました。**演劇と街の密な関係**、またその街ならではのドラマトウルギー、作り手や演じ手、観客たちが醸すさまざまなレジェンドとロマン——。

今回は、**80年代**を舞台とした**小劇場カルチャー**にフォーカスして、その渦中であって創造活動を行った演劇人の証言や挿話と共に、ダイナミックに変化してきた時代の表情を伝えたいと思います。

日時:2019年 **11/27** (水)
15:00-16:30

場所: **学習院大学**
西5号館B1教室